

名大医学部学友時報 2017 12

目次

- | | |
|---|---|
| 1. 第 6 回フライブルク大学・アデレード大学・名古屋大学 (FAN)
三大学間国際共同シンポジウム・合同運営会議を開催 …… (1) | 8. プレスリリース
行動性体温調節を駆動する温度感覚上行路の探索
八尋 貴樹 …… (10) |
| 2. 名古屋大学の心臓移植への取り組み
碓氷 章彦 …… (3) | 9. 支部だより
名古屋支部総会 …… (11) |
| 3. 准教授就任
加藤 太一 …… (4) | 10. 海外留学体験記
藤倉 舞 …… (12) |
| 4. 臨床教授のひとつ
金岡 祐次 …… (5) | 田中 玲子 …… (13) |
| 5. 医師倭人伝
西崎 彰 …… (6) | 11. 人生山あり谷あり
井口 昭久 …… (14) |
| 6. 会員寄稿
川村 陽一 …… (8) | 12. 時報旅行
…………… (14) |
| 7. 名古屋大学医学系研究科のプレスリリースによる
アウトリーチ活動
大野 欽司 …… (9) | 13. 「ホットサイエンス」原稿募集のお知らせ
…………… (16) |
| | 14. 編集後記
…………… (16) |

第6回フライブルク大学・アデレード大学・名古屋大学 (FAN) 三大学間国際共同シンポジウム・合同運営会議を開催



シンポジウム様子 1



シンポジウム様子 2

国際連携室 室長 国際医学教育学 教授 かすや ひでき
柏谷 英樹

10 月 6 日、フライブルク大学（ドイツ）、アデレード大学（オーストラリア）、名古屋大学は合同で国際共同シンポジウムと合同運営会議をフライブルク大学にて行いました。本国際共同シンポジウムは、3 大学間の持ち回りで毎年開催されており、今回で 6 回目を迎えました。

フライブルク大学構内にある生化学・分子生物学研究センター内で開催された本シンポジウムでは、まずフライブルク大学医学部長カースティン・クレグステイン教授のご挨拶があり、その後、神経科学分野・腫瘍学分野において各大学の参加者による研究発表が行われました。神経科学分野では、本学より大野欽司教授、木山博資教授がご発表され、他にフライブルク大学よりマルコ・プリンツ教授、ジャン・ブルザック先生がご発表されました。腫瘍学分野では、アデレード大学よりアレスター・パート教授、アンドレア・ユール教授、ルーク・セルス先生がご発表され、フライブルク大学よりティルマン・ブルーマー教授、スザンナ・ミングー先生、アレジャンドロ・ゴメス・アエリ先生がご発表されました。3 大学より合計 10 名の先生方による発表が行われ、多くの教員・学生が熱心に耳を傾け、活発な議論が行われました。また、例年同様に大学院生の発表も行われ、今年は 3 大学より 4 名の大学院生が参加しました。本学からは、名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻大学院生の吉原雅人先生（産婦人科学）、来年度同専攻入学予定の洪啓栄（神経性調節学）さんが研究発表を行いました。各分野とも素晴らしい発表が行われ、大学の枠を超えて活発な意見交換が行われました。また、本学の 2 名の学生は、関連するフライブルク大学内の研究室にて短期滞在し、研究活動を体験しました。ドイツ屈指の研究大学であるフライブルク大学は研究環境がしっかりと整備されており、多くのスタッフと最新の研究設備が整えられ、両学生とも短い間ではありましたが充実した研究生生活を体験することができました。このような国際シンポジウムや研究交流を通して 3 大学が連携を深め、学生や教員の交流、そして共同研究を促し、3 大学間の学術交流がますます発展することが期待されます。

また、本シンポジウムと並行して 3 大学合同運営会議が行われ、3 大学が積極的に推進しているジョイント・ディグリープログラムについて今後の運営方針を話し合いました。すでにプログラムを開始しているアデレード大学とは、今後の運営や対応について詳細な議論を行い、またフライブルク大学とは、来年度開設を目指している名古屋大学・フライブルク大学国際連携総合医学専攻（仮称）について、協定書の内容の確認や今後の進め方などについて活発な意見交換を行いました。この議論の中で、今後両大学間にて設置する新たなジョイント・ディグリープログラムの協定文書の内容の最終確認を行った他、同協定文書への署名に関して、本年 11 月に開催される JANET（在欧日本学術拠点ネットワーク）Forum で調印式を執り行うこと、また今後のプログラム運営に関して、入学時期や奨学金、事務手続き等に関する詳細な事項について両大学担当者が話し合いを行って協議を行い、双方の事情を考慮した上で今後の大体的な方針を決定することができました。最終的に、双方大学が今後も継続的に協議を行い、新たなジョイント・ディグリー設立に向けて引き続き協力を行うことで合意しました。このような合同運営会議は、実務を担当する教員が直接話し合いを行うことで相互の理解を深めることができる貴重な機会となっており、上記国際共同シンポジウム開催に合わせ毎年行なっております。今後も円滑なプログラム運営のため、継続的に 3 大学にて行っていく予定です。

今回で 6 回目となる本シンポジウムでは、非常に和やかな雰囲気の中で発表や討論が行われ、3 大学は各々の研究を通して上記研究分野における協力関係を深めただけでなく、国際共同教育プログラムに関する運営面でも相互の理解を深めることができました。来年度、アデレード大学にて同シンポジウムが開催される予定をしております。今後もこのような海外大学との国際的な合同シンポジウムを通して海外大学との国際連携を進め、本学の教育研究のさらなる発展を目指して進めてまいります。

名古屋大学の心臓移植への取り組み

病態外科学講座 心臓外科学 碓氷 章彦



名古屋大学は 2016 年 12 月 13 日付で成人心臓移植実施施設に認定され、第 1 例目の心臓移植手術を 2017 年 4 月 26 日に施行しました。私たちの心臓移植への道のは大変長いものでしたので、歩んだ道のりを学友会の皆様に簡単に紹介させて戴きます。

心臓移植実施施設の公募には、1993 年に阿部稔雄初代教授、2003 年に上田裕一前教授が申請を行いました。1993 年には心臓移植にふさわしい施設として認定を受けましたが、実施施設には至りませんでした。2003 年は準備不足との評価でした。

2008 年に「臓器取引と移植ツーリズムに関するイスタンブール宣言」が採択され、渡航移植に頼っていた日本の現状は大きな批判を受け、2010 年に臓器移植法案が改訂されました。この結果、家族の同意により臓器提供が可能となり、現在は年間約 50 例程度の心臓移植が行われるようになり、心臓移植が重症心不全治療の最終目標となりました。

名古屋大学は 2010 年の心臓移植実施施設再公募には準備不十分との判断で応じませんでした。心臓移植開始の準備を進めました。2010 年に六鹿病院講師、2011 年に藤本病院講師が海外での心臓移植フェローを経験し帰国しました。私たちがまず取り組んだ事は、重症心不全患者に対する植込型補助人工心臓 (VAD) 治療です。植込型 VAD 治療は 2011 年に保健適応となりましたが、施設認定を受けるためには体外式 VAD での 3 ヶ月以上の管理経験を必要としました。これまでの体外式 VAD では 1 ヶ月以上の管理例がなく、私たちは欧米で行われている遠心ポンプを使用した体外式 VAD を採用しました。また、心臓外科単科での管理ではなく、循環器科、ICU、精神科、ICT、看護部、ME、心リハ、栄養士、薬剤師など、多職種によるチーム医療体制を築きました。2011 年 11 月に薬剤性拡張型心筋症の症例に対し、遠心ポンプ体外式 VAD 治療を行い、約 1 年間の管理の後に VAD 離脱に成功しました。遠心ポンプは ICU 管理を要するため ICU ベッドを 1 年間占拠する事となり、病院には大きな負担をおかけしました。寛大な対応をとって戴いた石黒病院長にはこの場を借りて感謝申し上げます。

この症例の経験をもとに 2013 年 1 月に VAD 協議会から植込型 VAD 実施施設認定を受けることができました。10 月に体外式から植込型への Bridge to Bridge として、第 1 例目の植込型 VAD 手術を行いました。その後 4 年が経過しましたが、現在までに 25 例の植込みを行っています。

次にめざしたのが心臓移植実施施設認定です。名古屋大学で心臓移植を行うためには、病院の総意が最も重要です。病院長の決意文は有効ですが、病院の総意をもって心臓移植を実施するために「心臓移植実施ワーキンググループ」を 2015 年 5 月の病院部長会で設置してもらいました。心臓移植実施施設の申請書類には多職種にわ

たる詳細なデータが必要となります。WG メンバーの皆様には大変尽力して戴き、気の遠くなるような膨大な申請書類を完成することができました。WG メンバーの皆様には感謝申し上げます。

心臓移植実施施設申請は植込型 VAD が 10 例を超えた段階を予定していましたので、十分な準備の後に 2016 年 2 月に書類申請を行いました。6 月に書類審査に合格し、8 月 18 日にサイトビジットを受けました。今回の申請では、3 大学が申請を行いました。サイトビジットに至ったのは名大のみでした。

サイトビジットにむけ、心不全に対する治療体制を明確にするために「重症心不全治療センター」を 7 月の病院部長会で設置してもらいました。サイトビジットでは、病院が一丸となって心臓移植に取り組んでいる姿勢を高く評価して戴き、12 月 13 日付で移植関連学会合同委員会から成人心臓移植実施施設認定を受けました。

2017 年 4 月 1 日に日本臓器移植ネットワークへ入会し、心臓移植実施の体制が整い、第 1 例目の心臓移植手術は 4 月 26 日でした。日本では 331 例目の心臓移植となります。患者さんは 3 回目の手術であり、止血操作には長時間を要し、10 時間を超える手術時間となりましたが、術後経過は良好で、術後 2 ヶ月目の 6 月 27 日に軽快退院されました。十分な準備の下に第 1 例目の心臓移植を行い、良好な経過に推移でき、責任者としては安堵していますが、心臓移植チームの成熟にはまだまだ時間が必要と思っています。

東海地区の心臓移植を最終手段とする重症心不全治療は非常に遅れた状態にありましたが、ようやく大阪、東京の後ろ姿が見える位置まで近づけたと思います。心臓移植実施施設を取得するために構築した重症心不全治療センターは、当初はバーチャルな組織でしたが、私がセンター長を拝命し、六鹿病院講師が外科系副センター長、奥村病院講師が内科系副センター長として活躍し、循環器内科医 13 名、心臓外科医 4 名、人工心臓技術管理士 2 名、コーディネーター 6 名の組織となり、実働的な組織に成長しました。本年 4 月以降は毎週のように重症心不全症例の紹介を戴き、心臓移植適応検討委員会では毎月複数名の適応審議を行い、毎月植込型 VAD 手術を行っています。

心臓移植・VAD 治療には多くの先生の協力を必要とします。若い先生にはこの治療を支えるこれからの柱になって戴きたいと希望します。関連する領域の先生方には VAD・心臓移植治療にご理解を戴き、是非ご協力をお願い致します。

この領域には社会的なバックアップが非常に重要です。学友会の皆様には更なるご理解ご協力を心からお願い申し上げます。重症心不全治療センターは、まだまだ発展途上にあります。今後とも益々のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。